

海外活動キャリアをもつ日本人ダンサーと
コレオグラファーの関係を中心とした事例研究
～ダンスカンパニーへの所属を通して～

Study of Relationship between the Japanese Dancers with overseas Career
Experience and their choreographers
- Through the belonging to the dance company -

三輪 亜希子
MIWA Akiko

[要約]

20 世紀の舞踊はヨーロッパを中心に展開し、日本にはプロ制度がほとんど無いことからダンサーは海外へと渡っているといっても過言ではない。中でもピナ・バウシュやモーリス・ベジャールといった 20 世紀の舞踊史に改革をもたらした「巨匠」の下で直接創造活動を共にした貴重な経験をもつダンサーがいる。

本研究では、20 世紀の舞踊の偉大なコレオグラファーの下で、ダンサーとしての第 1 ステージを体験した日本人ダンサーを対象にした。彼らへのインタビューデータに質的研究による分析手法を当て、ダンサーの心理や感覚を考察する。

キーワード：

ダンサー、コレオグラファー、カンパニー

[Summary]

20th Century Concert Dance expanded mainly in Europe, and there is no system of professional dance company in Japan. There are the Japanese Dancers with overseas Career working together with the greatest and most well known world choreographers of 20th Century Concert Dance. The purpose of this study was to extract keywords that describe psychology and sense of that dancers through the researcher's interviews with them. Furthermore, It became apparent that the dancers regarded the past as an era where 20th Century Concert Dance was characterized by the great symbiotic relationship between the dance companies that created the performances and the choreographers that lead such performances.

Keywords:

dancer, choreographer, company

1. 研究背景

筆者は2011年よりダンサーを対象としたインタビュー形式の調査を進めている。研究の出発点として、20世紀初頭から起こった舞踊の変遷に関するダンサーから見た捉え方、そして、コレオグラファーとの活動を通して培われたダンサーとしての心理と舞踊哲学に着目した。舞踊は、特に20世紀初頭からその芸術的地位と表現の自由を確立し、絵画や音楽といった他の芸術との呼応や社会的事象へのまなざしと共に様々な演出により提示されてきた。こうした舞踊の変遷には、コレオグラファーが示した舞踊作品とそこに込められたメッセージ、作品の担い手となるダンサーへ対して求める意識の持ち方が大きく影響している。特に筆者の研究の中では、ダンサーを主軸としながらもコレオグラファーとの関係の中で得たダンサー各人の舞踊に対する意識に関しての考察が中心となっている。これまでの研究では、「海外活動キャリアをもつ日本人ダンサーが捉える20世紀の舞踊と今後－コレオグラファーとの関係を中心に－」（2011）、「ダンサーの立場からみる「10年」間隔－海外活動キャリアをもつ日本人ダンサーの声を手掛かりに－」（2012）、「海外活動のキャリアをもつ日本人ダンサーの「言葉」を探る－「素直な身体」という捉え方に焦点をあてて－」（2013）、「海外活動のキャリアをもつ日本人ダンサーの捉える身体意識と創造力」（2015）と、着目点を変えながらダンサーの語りと現代ダンスの状況を照らし合せた考察を続けてきた。

2. 研究目的

この度の研究では、2011年に行った調査の中から質問項目と対象者を絞り込むことで新たな考察を行う。具体的に、対象者はコレオグラファー、ピナ・バウシュとイリ・キリアンのカンパニー所属経験をもつダンサー各2名を選定し、質問項目は、主にコレオグラファーとの関係についてとした。KJ法を採用し、より細部まで言葉を読み解くことで、全体を包括した内容ではなく一人一人の語りの中に閉じ込められたダンサーの在り方を提示したい。コレオグラファーとダンサーの関係には一定の基準があるのではなく、出会った一人一人の中で他には類似しない築かれ方があるのではないだろうか。

3. 研究方法

海外活動キャリアをもち、現在もフリーで活動を継続するプロの日本人ダンサーに対するインタビュー調査。インタビューは、あらかじめ用意した質問から話の脱線を許す半構造化形式を採用した。

【質問群】

- ① 「コレオグラファー〇〇の下で踊ろうとなった経緯を教えてください。」
- ② 「カンパニー入団後、それまで抱いていたコレオグラファー〇〇へのイメージと違いなどはありましたか。」
- ③ 「その後、〇〇年～〇〇年までカンパニー所属をされていますが、長期滞在を後押しした要因を教えてください。」
- ④ 「コレオグラファー〇〇のクリエーションの中で、その特徴、興味深かった事は何か。」

上記の質問はすでに2011年に実施。2011年調査時の12名の対象者の中から、所属していたカンパニーのコレオグラファーが同じ2名×2組を抜粋し、この度考察の再考を行った。

分析方法はKJ法である。質的な研究を行うためにKJ法を選択した。調査対象者の心理を読み解き、常に変動する舞踊の価値観と照らし合わせながら、内部観察といった尺度で分析を進めるためには量的な研究よりも質的な研究が適していると判断した。研究者自身の「現場感覚」(無藤, 2004, pp 5)を手掛かりに、調査対象者から語られた内容と、研究者の見てきたものを整理しながら、この研究で何を提示したいのかを焦点化する。インタビューデータを分析する際に、こうした「現場感覚」を下にした質的な判断を投影しながらも、データを量的に形成していくことで質と量の分析をつなげ、詳細な記述を基にした新たな発見を試みたい。

4. 研究者の立場

この研究を行うに当たり、分析者自身が調査対象のダンサーと同じフィールドで舞踊活動を行っていることを分析の視点の基盤とすることを記しておく。研究者自身は幼少期からのダンス経験を持つ。主な活動歴として、数名のコレオグラファーの作品へダンサーとして出演した経験を持ち、自身で振付を考案する機会もある。また、一つのダンスカンパニーに10年に渡り所属をしている。そのため、コレオグラファーとダンサーの関係性を質的に分析する上で、研究者自身の経験値から見えてくる観点や信念が左右する点も記しておきたい。

5. 調査の詳細及び倫理的配慮

インタビュー調査は、2010年5月下旬～9月初旬の期間内実施した。インタビュー許可を得られた者へ研究者から具体的な日程依頼を行い、可能な限り事前にWS参加や舞台観賞を行うことで、インタビューの補足データとした。事前に対象者の経歴とカンパニー所属期、カンパニーのコレオグラファーの経歴を調査し、資料を手元に置きながら聞き込みを行った。対象は主に、海外活動キャリアを持つ日本人ダンサーとした。具体的に、筆者が舞台鑑賞を多数行っているという事実から現代のダンスを活動拠点としている者とした。更に20世紀の舞踊を研究の目的とするため、20世紀の舞踊史に名を残す著名なコレオグラファーの下で直接の関わりを持ち、長期に渡るカンパニー活動を共にしていることを前提に対象者を絞り込んだ。対象者の選定は、研究者がこれまでの舞台活動を通して名前を把握していたダンサーを含め、ダンス関係者への聞き込みを通して思い当たるダンサーをピックアップして行った。その上で経歴の詳細を調査し、ダンサー名と入団をしていた(あるいは入団をしている)カンパニー名、コレオグラファー、入団年数、現在の活動拠点、実地調査期間中の活動情報をデータにまとめ、具体的に聞き込みが可能であることを検討していった。コレオグラファーと調査対象者の関係については図1へ示す。面接時間は約60分とし、筆記およびビデオカメラを用いて記録を行った。ビデオカメラでの記録に対してインタビュー開始前に対象者の許可を得る配慮を行った。インタビュー項目は全11項目用意し、話の流れで聞き込むタイミングを変えながら、対象者の立場に合わせ

て選択し、必要に応じ項目数や内容の修正を行った。この度の研究で使用するのは11項目中、4項目である。質問項目の内容設定は、20世紀の舞踊に対する見解を聞き出す事を目的に、文献や雑誌、Web上でのダンサーへ対するインタビュー記事を参照した。

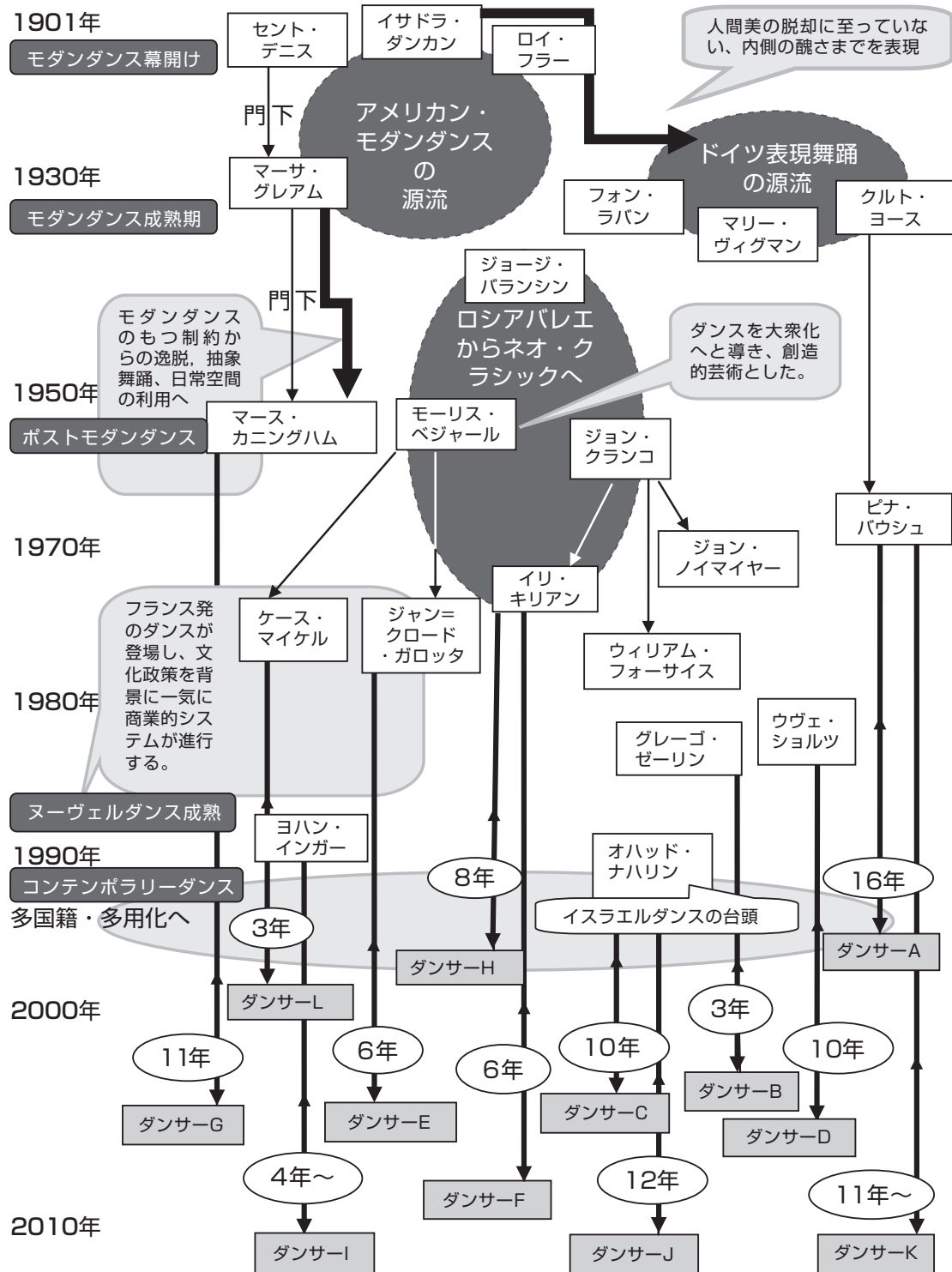


図1 調査対象者に関わる20世紀の舞踊の変遷の外観図(2011,三輪)

6. コンテンポラリーダンスの変遷

この度の研究対象であるダンサーは、コンテンポラリーダンサーに分類される。コンテンポラリーダンスの歴史的な位置づけとしては1980年代頃にヨーロッパを中心に発祥したとされる。型通りでない創作的なダンスとして、現在世界各地に広がり、演出や上演の場においても進化を続ける舞踊のことを指す。動きのジャンルや発表形態に固定概念を持たず、バレエや民族舞踊、ヒップホップ、サーカスといった多数の身体表現とコラージュされながら進化した。それを支えるのは作家、振付家、演出家の存在であり、個々の哲学や舞踊思想が大いに反映された舞踊とも言える。振付家の思想が大きく反映される作風と共に、創作の過程や上演の規模も多様であり、カンパニーの形態が振付家によって大きく異なる点もコンテンポラリーダンスの特徴の一つである。(2016, 三輪)

7. ダンスカンパニー

主に、劇場による雇用を通して成立する。定期的、あるいは欠員が出た段階でオーディションが実施され、定員数や男女比、人種などを基準に採用される場合が多い。芸術監督としてコレオグラファーが雇用される場合も多く、芸術監督は、契約期間内に劇場にて新作創作やレパートリー作品のリハーサル、委嘱アーティストの選定、年間ラインナップの決定などを行う。劇場や国によってシステムは異なるが、上演の決定権を持つのが芸術監督である場合が多い。

8. 考察

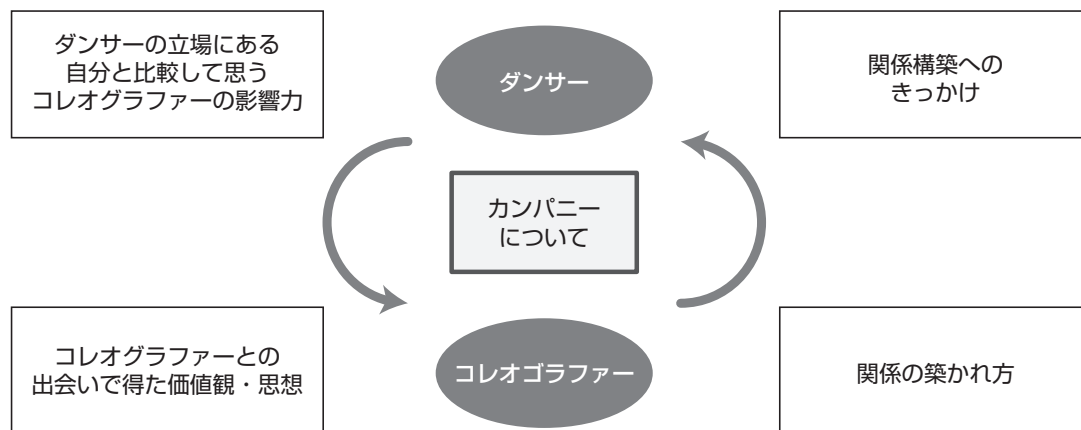


図2 KJ法の分類を基にしたダンサーとコレオグラファーとの関係

KJ法の分類は、質問項目①～④に対する調査対象者の答えを分解し、以下の理由により「関係構築へのきっかけ」、「関係の築かれ方」、「カンパニーについて」、「ダンサーの立場にある自分と比較して思うコレオグラファーの影響」、「コレオグラファーとの出会いで得た価値観・思想」という5つのグループに分ける試みを行った。グループ分けの根拠は、コレオグラファーと出会った時期の具体的な内容に関しての発言を「関係構築へのきっかけ」とし、共に過ごした時間や間柄など、お互いの関係がどのように形成されている

かを予期させる発言を「関係の築かれ方」、彼らが所属していたカンパニーがコレオグラファーの人柄を通じてどのような組織であったかに関する発言を「カンパニーについて」とした。そして、コレオグラファーとの具体的なやりとりを通してどう感じたか、どう行動したかを指す発言は「ダンサーの立場にある自分と比較して思うコレオグラファーの影響力」、肯定的にも否定的にもどちらの場合であれコレオグラファーの感覚から影響を受けたことに関する発言は「コレオグラファーとの出会いで得た価値観・思想」とした。

8-1 KJ法による分類

8-1-1 「関係構築へのきっかけ」

ダンサー A	回答①-a	(体育教師) 体育が嫌いな子もいる環境での教えに疑問
ダンサー A	回答①-b	どうせならダンス好きな子に教えたい
ダンサー A	回答①-c	ロンドンでダンスクラスを受けていてやっぱりダンスがやりたいと
ダンサー A	回答①-d	先生からプロを勧められたの
ダンサー A	回答①-e	スザンヌ・リンケルに出会った (ピナ・バウシュと従兄弟)
ダンサー A	回答①-f	スザンヌが「春の祭典」(ピナ・バウシュの作品) のリハを見せてくれたの
ダンサー A	回答①-g	衝撃を受けた
ダンサー A	回答①-h	アシスタントから「ピナが話したい」と言われ、カンパニーに誘われたの

ダンサー K	回答①-a	19歳で Folkwang 芸術大学へ入学
ダンサー K	回答①-b	ピナ・バウシュと同じ大学
ダンサー K	回答①-c	その後、Vuppattal 舞踊団のオーディションを受け
ダンサー K	回答①-d	「春の祭典」にエキストラで出演
ダンサー K	回答①-e	リハーサル中に、ピナから「衣裳合わせしてきて」と言われ

ダンサー F	回答①-a	海外へ行く最初のきっかけは、ローザンヌ国際
ダンサー F	回答①-b	高校2年生の時、もうバレエ辞めようと思っていた
ダンサー F	回答①-c	記念にと思って、北海道バレエセミナーへ行った時に衝撃を受けた
ダンサー F	回答①-d	周りのみんなは同世代なのに海外へ留学している人やプロを目指している人ばかり
ダンサー F	回答①-e	日本でダンサーになる選択肢が無かったから辞めようと思った
ダンサー F	回答①-f	「舞台芸術」に行きたくそれならヨーロッパかなと
ダンサー F	回答①-g	あの頃、海外へ行けるチャンスはローザンヌしかなかったの
ダンサー F	回答①-h	コンクールに出たらたまたま賞を頂けて、17歳でした
ダンサー F	回答①-i	(バレエ団入団) その年の10月に NDT の作品も生で見ました
ダンサー F	回答①-j	この時はここまでは行けないなあと漠然と感じていましたが
ダンサー F	回答①-k	モンテカルロ (バレエ団) に入って初めて見たのがキリアンの作品だったし、運命的な出会いが続きました

ダンサー F	回答①-l	踊ってみて、やっぱり好きだなあと
ダンサー F	回答①-m	キリアンさんの作品ももっと踊りたくてそれでオランダへ行きました

ダンサー H	回答①-a	モナコのカンパニーに入ったばかりで
ダンサー H	回答①-b	ダンサーたちが練習しているのを見ている状態
ダンサー H	回答①-c	たった 20 秒ぐらいのシーンの練習を見てすごいなと思って
ダンサー H	回答①-d	そこで何か特別な力を感じました
ダンサー H	回答①-e	作品が段々出来上がっていく様子を見ていて、これはカンパニーに行きたいという気持ちが強くなって
ダンサー H	回答①-f	オーディションを受けたんです

この度の調査でインタビューを行ったダンサーは、主に様々な形でコレオグラファーの作品と出会い、回答①-d (ダンサー H)「何か特別な力を感じました」や、回答①-k (ダンサー F)「運命的な出会いが続きました」というように、何かに導かれていくような見えない力を感じ、興味を抱いている。ダンサーが踊ってみたいという思いを抱くに至るのは、コレオグラファーが発信する作品のテーマやメッセージ性について共に活動することによってもっと知りたいという意欲が沸く場合や、また、作品を踊っているダンサーたちを見てそのように踊りたいと自己投影するといった場合があるであろう。共に作品創作に挑む理解者への欲と、作品に具体的に登場するプレイヤー (ダンサー) として挑戦したいという欲の両面である。特に彼らは、ダンサーとしての力量も高かったことから、カンパニーオーディションに受かるという結果を得たダンサーであるが、回答①-e (ダンサー K)「リハーサル中に、ピナから『衣裳合わせしてきて』と言われ」にみられるように、世界ががらりと変わる運命的な瞬間を直接的にコレオグラファーによって与えられている。

8-1-2 「関係の築かれ方」

ダンサー A	回答②-a	ピナとは姉妹的な間柄
ダンサー A	回答②-b	いまいるメンバーとの接し方とは違うと思います
ダンサー A	回答②-c	私は思っていることを言えたダンサー
ダンサー A	回答③-a	(長期滞在の) 理由はというか、ピナより素晴らしい人は他にいない
ダンサー A	回答④-e	結局わたしなんかは長くカンパニーにいたから
ダンサー A	回答④-f	ダンサーとの関係よりもっともっと近かった気がします

ダンサー K	回答②-a	有名な話だけど、ピナはリハーサル中にダンサーへ質問します
ダンサー K	回答②-b	その質問に対して何故か答えられないという時があってそれが辛かった
ダンサー K	回答③-a	ピナが亡くなる以前といまは滞在する目的が違う
ダンサー K	回答③-b	彼女の目はすごいんです
ダンサー K	回答③-c	確かにずっと一緒にいたから

ダンサー K	回答③-d	嫌気がさす時もあるけれど
ダンサー K	回答③-e	先輩ダンサーたちから学ぶことも多く、自分のホームのような環境だから
ダンサー K	回答④-a	ただ（質問の）答えを出してもピナは何も言いません

ダンサー F	回答②-d	NDT2で僕が入った年がキリアンさんがオーディションに関わった最後の年
ダンサー F	回答③-a	長期滞在というか、帰国の理由はキリアンさんがNDTを離れたから
ダンサー F	回答④-a	印象に残っているのは「演じないで欲しい」という台詞
ダンサー F	回答④-b	ラストシーンはインプロになっていて
ダンサー F	回答④-c	おれだから自由にやってくれとキリアンさんは言ってくれた
ダンサー F	回答④-d	「そこはダンサー F がどう表現するか見たいから」と言ってくれて
ダンサー F	回答④-e	アクトしなくても良くて、自然でいられた

ダンサー H	回答③-a	ダンスシアターの方って13歳から53歳までいたりしてみんなとても長いから
ダンサー H	回答③-b	私なんてほんとに短い方なのだけど
ダンサー H	回答③-c	他者に提示されていくものはみんなエキサイティングで
ダンサー H	回答③-d	それを肌で感じられるのは良かった
ダンサー H	回答③-e	カンパニーにいたころは、自発性よりも（コレオグラファーの）美意識への憧れや意欲の方が強かったのかな
ダンサー H	回答④-a	作品作りの中でないコミュニケーションなど色々なものがあるけど
ダンサー H	回答④-b	「失敗しないようやるのがすでに失敗」だなんて事をよく言ってくれましたね

回答②-a（ダンサー A）「ピナとは姉妹的な間柄」など、ダンサーとコレオグラファーという仕事上の関係以上の絆を感じさせる発言がある。そして、回答③-b（ダンサー K）「彼女の目はすごいんです」や、回答③-a（ダンサー A）「ピナより素晴らしい人は他にいない」など、コレオグラファーに対して尊敬の念を抱いていることをダンサーそれぞれの言葉のニュアンスで語っている。また、回答④-d（ダンサー F）「『そこはダンサー F がどう表現するか見たいから』と言ってくれて」や回答④-a（ダンサー K）「ただ（質問の）答えを出してもピナは何も言いません」、回答④-b（ダンサー H）「『失敗しないようやるのがすでに失敗』だなんて事をよく言ってくれましたね」などは、コレオグラファーがダンサーに対して全面的に信頼しており、作品がどのように観客に受け入れられるかは各ダンサーが自由に挑戦したものに任せているといった姿勢が感じられる発言であった。

8-1-8 「カンパニーについて」

ダンサー A	回答②-d	ピナはダンサーを褒めることはなかった
ダンサー A	回答④-a	落ち込んでいるとピナは声をかけてくれます

ダンサー A	回答④-b	そういう温かい面をわたしたちは見てますけどね
ダンサー A	回答④-c	1対1のダンサーとして対応してくれて
ダンサー A	回答④-d	それぞれに関係が違った

ダンサー F	回答②-a	キリアンさんの作品で舞台数をこなして
ダンサー F	回答②-b	自然とみんなキリアンスタイルが身についていくという状況でした
ダンサー F	回答②-c	個人がというよりグループ全体のスタイルを持っていた
ダンサー F	回答③-b	積み上げてきたものが崩れるのは早かったです
ダンサー F	回答③-c	自分の信頼するダンサーがいることが、キリアンさんにとって一番大事なことでした
ダンサー F	回答④-f	キリアンさんの年齢的な問題もあって
ダンサー F	回答④-g	動いて見せる機会も減ってきました
ダンサー F	回答④-h	本当に信頼しているダンサーしか使わないし
ダンサー F	回答④-i	人間として理解してないと出来ない作業でした

ダンサー H	回答②-a	カンパニーに所属しているということは
ダンサー H	回答②-b	大きく時代をまたぐというよりも
ダンサー H	回答②-c	一つ一つの課題に向かっていく作業ですから
ダンサー H	回答②-d	その中に流れている一貫した精神性や美意識なんかを感覚的に受け止めることになりますよね

回答②-c (ダンサー F) 「グループ全体のスタイル」というように、ダンサーとコレオグラファーが共にグループを築き上げてきた感覚を持っていると語る発言があった。また、所属しているカンパニー自体が世界的に注目を置かれ、頻繁に世界ツアーを実行し、新しい作品を生み出し続けるといったある種のシステムチックな環境の中に身を置きながらも、「それぞれ関係違う」「一対一」という言葉が上がるように、エネルギッシュな作品を発信し続けるためには、回答④-i (ダンサー F) 「人間として理解してないと出来ない作業」であることを、ダンサーが自覚し、コレオグラファーの特性を十分に理解していることが重要であるとわかった。

また、カンパニーに所属しているということは、回答②-c (ダンサー H) 「一つ一つの課題」という作品創作に込められた繊細なやりとりがあり、そこに集中している渦中であって、周りがどのようにカンパニーの勢いを評価しているのか客観的に受け止めることは難しいといった回答もあがった。

8-1-4 「ダンサーの立場にある自分と比較して思うコレオグラファーの影響力」

ダンサー A	回答②-e	ピナは感性のするどい方
ダンサー A	回答②-f	ピナは独裁的ではないけれど、はっきりいって天才
ダンサー A	回答③-b	わたしが自分で今後何か作品を作るとなるとピナになってしまう

ダンサー A	回答③-c	自分のダンスはピナから切り離すことができません
ダンサー A	回答③-d	踊りをやめるか自分で作るかであれば、離れることが出来たかも

ダンサー K	回答③-f	ピナとの出会いは自分が分からなかった自分を引き出してくれた
ダンサー K	回答③-g	だから、もっと（自分を）発見したいという気持ちでカンパニーにいたの
ダンサー K	回答③-h	作品の中にドラマがある
ダンサー K	回答③-i	それに生かされている感覚もあるかな
ダンサー K	回答④-b	一度出してしまった答え（動き）はピナにあげることになるから
ダンサー K	回答④-c	料理は彼女に任せるだけ

ダンサー F	回答③-i	（長期滞在について）特にキリアンさんから何か言われることはなかったです
ダンサー F	回答④-j	昔の記憶って良いものや嫌なものが沢山あって
ダンサー F	回答④-k	その時におれ自身の記憶とキリアンさんの記憶の幅や大きさの違いにすごく重みを感じてしまった
ダンサー F	回答④-l	だからこんな責任の大きなことは出来ない
ダンサー F	回答④-m	キリアンさんに直接相談したんです。そうしたら
ダンサー F	回答④-d	「そこはダンサー F がどう表現するか見たいから」と言ってくれて
ダンサー F	回答④-n	すごくうれしかったです。
ダンサー F	回答④-o	おれもキリアンさんの作品では
ダンサー F	回答④-i	アクトしなくても良くて、自然でいられた

ダンサー H	回答②-f	でも、ダンサーの練習はこの手の角度がどうだとか具体的な作業でもあるから
ダンサー H	回答②-g	なかなか奥に秘められた部分で気付かないことなんだけど
ダンサー H	回答②-h	ある日突然具体的なものから、はっと本質的なものが見つかって
ダンサー H	回答③-f	作品とかは常に生み出されていくし
ダンサー H	回答③-g	作品だけでなく、新しい美意識とか哲学とか価値観
ダンサー H	回答③-c	他者に提示されていくものはみんなエキサイティングで
ダンサー H	回答③-d	それを肌で感じられるのは良かった
ダンサー H	回答③-j	やっぱり統制的にはなっていくし
ダンサー H	回答③-k	もしダンサーの中にも人の作品を踊ることが一番自分の好きな状況だっていう人ならいいんだろうけど
ダンサー H	回答④-c	一人の作家を中心に行っているカンパニーだったし
ダンサー H	回答④-d	国内外へのツアーもあった

回答③-d（ダンサー A）「踊りをやめるか自分で作るかであれば、離れることが出来たかも」にみられるように、究極の選択肢を想定してしまうほど、彼らにとってのコレオ

グラファーとは偉大な存在であった。そうしたコレオグラファーの偉大さを指す言葉として「感性のするどい方」「天才」「重みを感じる」「一人の作家を中心に」といった発言もあがる。そして、「作品の中のドラマに生かされている感覚」とダンサー K が述べるように、コレオグラファーの下でダンサーとして踊ることが生きることそのものの感覚に隣接している様子が伺える。

ダンサー H は、ダンサーとしての達成感、喜びについて語る。「ダンサーの練習はこの手の角度がどうだとか具体的な作業」という回答があがるように、ダンサーとしてコレオグラファーの作品に携わるといことは、渦中の中で客観的な自分の立場を考える余裕などはあまりなく、作品一つ一つの課題に繊細に応えていく日々だと想像できるが、彼らの述べる、ある日突然出会える作品の中に込められた「本質的」なものこそが、ダンサーという立場が一番生きがいを感じる舞踊の真髄なのであろう。

8-1-5 「コレオグラファーとの出会いで得た価値観・思想」

ダンサー A	回答④-e	外から見るとわたしちって自信を持って立っているように見えたかも
ダンサー A	回答④-f	でも中身は違う
ダンサー A	回答④-g	自分の中で葛藤があった
ダンサー A	回答④-h	それが（作品の）緊張感を生むんでしょけどね

ダンサー K	回答②-c	ピナの作品に対するイメージとしては、人間臭いとか怒りも笑もあるとは思っていました。
ダンサー K	回答②-d	入団前はフィジカル部分のみに囚われていたけど
ダンサー K	回答②-e	ヴッパタールに入ってから
ダンサー K	回答②-f	自分は誰なんだろうという自己の内面を見つめるようになった
ダンサー K	回答②-g	今まで身体能力を問うレッスンばかりやってきたのかなと感じた
ダンサー K	回答④-d	質問に答えられなかったもどかしさ
ダンサー K	回答④-e	やっぱり同じ質問が毎年あって
ダンサー K	回答④-f	自分の中で変わっているというか、人間として成長しているってこと
ダンサー K	回答④-g	確かめる機会になった

ダンサー F	回答③-d	オーディションの時には面接、インタビューもありました
ダンサー F	回答③-e	ダンスの上手い、下手だけでは判断しないというか
ダンサー F	回答③-f	面接で落ちる人が多かった
ダンサー F	回答③-g	聞かれたことは簡単で、ダンスを始めたきっかけと
ダンサー F	回答③-h	何故 NDT に来たのか、ということ
ダンサー F	回答④-p	舞台上でも緊張しなかったんです。
ダンサー F	回答④-q	もちろん最初は素になるのが難しかった

ダンサー H	回答②-e	新しい作品はその一貫したキリアンさんの美意識なり精神性に、更に時代の影響やそのつど対話やリンクによって少しずつ変わっていくことになります。
ダンサー H	回答③-h	ダンサーはクリエイティブであり
ダンサー H	回答③-i	その自分の感覚をどうカンパニー活動に取り込んでいくかだと思うんだけど。
ダンサー H	回答③-l	自発性が強いダンサーは葛藤することも多いはず
ダンサー H	回答④-e	彼の作り出す作品って、例えば作品を車に見立てると
ダンサー H	回答④-f	「車に乗って自分が運転して、自分が見たい物や感知する物に向かって走り続けなくちゃいけないんだ」
ダンサー H	回答④-g	というようなことをダンサーに向けて舞台前に言われたりしました。
ダンサー H	回答④-h	「その瞬間を掴み取れ」とか
ダンサー H	回答④-i	木刀ではなくて神剣っていうのかな、切れ味のいいものに例えて、今しかないってことを強調してくれていました。
ダンサー H	回答④-j	「今」を観客とシェアすることが大事
ダンサー H	回答④-k	いつもリスクを負わなきゃいけない
ダンサー H	回答④-l	この速さだと間に合うっていう動きがあっても
ダンサー H	回答④-m	自分でもリスクがあるなというところへ向かわなくてはだめ
ダンサー H	回答④-b	「失敗しないようやるのがすでに失敗」だなんて事をよく言ってくれましたね

上記の回答群から読み取れることとしては、総括として以下のことがいえるのではない。例えば作品から滲み出る緊張感とは、ダンサーが舞台上で放つ臨場感をもたらすものであろう。偉大なコレオグラファーの作品を踊り続けるパートナーともいえる彼らも、一つ一つの課題を繊細にクリアしていく作業の渦中に置かれ、客観的に受ける華やかなイメージとは逆に、絶えず自分が試され、晒される立場にいた。ダンサーというものが作品の担い手であり、観客に対してコレオグラファーのメッセージをダイレクトに届ける立場であるという事実を、大舞台の中で体感し続けてきた彼らから得たリアルな発言であった。

ダンサー K からは「フィジカルに囚われていたのかな」など、動き方のみでなくダンスをどう捉えるのかといった内面を刺激されたことがわかる発言が聞き取れた。コレオグラファーとの出会いにより、ダンスの捉え方や作品の中でどういったメッセージを身体に乗せていくのかというような、フィジカルなパフォーマンスを超え、想いの伴った身体への掘り下げを体験していった様子が伺える。ダンサー F の述べる回答④-p (ダンサー F) 「舞台上で緊張しなかった」や「素になる」感覚もまた、コレオグラファーの作品の中で望まれ、掴んだ身体の在り方であろう。

ダンサー F からは、コレオグラファーがオーディション時に希望理由を直接聞くなど、ダンスのスキル以外の人間性と熱意を大切にしているコレオグラファーであるとわかる発言がみられたが、ダンサー F 自身の振付作品への出演者を選ぶ時の観点を尋ねた際も、「スキルも大切だが自分にはない考え方や視点を持っていて先入観を持たない若い世代を選びたい」と答えていたように、ダンサー F 自らがコレオグラファーとして立つ場合も、人間

性と自分とのダンスを通して成長を望むような相手を基準にしていることがわかった。それは、巨匠から影響を受けた価値観であろう。

ダンサー H からは、舞台に乗るダンサーのモチベーションについて様々な例え話で語るコレオグラファーの言葉の表現についての回答が多くあがり、比喩的にダンスを捉えることに強く影響を受けているということが読み取れた。「ダンサーはクリエイティブ」という発言からも、コレオグラファーとの創作を通してダンサーが果たすべき役割を掴んできた様子が伺える。ダンサーというものが作品を通して観客と直接対話をする存在であり、「観客とシェア」というコレオグラファーからのアドバイスをダンサー H があげるように、ダンサーは作品を共同創作するクリエイターであり、更に、観客に対してコレオグラファーからのメッセージを届けるメッセンジャーとしての役割も担うことを共に活動する中で自然に身につけていったのであろう。

9 結論

舞踊は、20 世紀初頭のモダンダンスの登場から 100 年余りの歳月をかけ、「巨匠」と呼ばれる才能溢れるコレオグラファーの登場により、再生と崩壊を繰り返してきた。

「巨匠」亡き現在も、その舞踊美学と人間性を受け継ぎながら、新たな各人のステージを築きはじめたダンサーがいる。本研究はその数少ない数名のダンサーが発する言葉に焦点を当てたものである。

コレオグラファーとダンサーの間に、「信頼」と興味が続くということには、作品への興味以上に人間的な言葉の交わり合いや、ダンスに対してどのように考え、何を提示して欲しくてダンサーに要求をするのかへの理解と、知りたい、そして体得したいという欲が裏付けるのではないか。ダンサーに求められる資質というのは美しい肢体はもちろんのこと、作品への理解力と解釈力、コレオグラファーに対する愛情であろう。その愛情の構築に必要なことは、投げかけられる言葉やプロセスへの共感、身体の扱い方への興味や共感、ダンスを通して何を提示しているコレオグラファーなのかという、作品を通したメッセージについての興味や共感であろう。今回のインタビューを通して、コレオグラファーからダンサーへ投げかけられた過去の言葉群について、ダンサーが緻密に記憶していたことに、その影響力と共感力の両面を強く感じた。

こうした結論を踏まえ、この研究は、一流の世界で人望厚きコレオグラファーと共にプロフェッショナルなダンサー経験をした彼らの言葉を分析することで、これからダンサーとしての高みを目指す者やダンスとは異なる分野で活動する者にとって、考えや価値観を深める導き書となることを願う。

参考文献

- 1) 尼ヶ崎彬(2002)海図のない航海—90年代のコンテンポラリー・ダンス。コンテンポラリー・ダンス・シリーズ4、愛知芸術文化センター：12-15
- 2) 尼ヶ崎彬(2004)ダンス・クリティーク 舞踊の現在 / 舞踊の身体。勁草書房、東京
- 3) 市川雅(1995)ダンスの20世紀。新書館、東京
- 4) 大竹千春(2000)イリ・キリアン研究(Jiri kylian - 1947 ~) ~ネザーランド・ダンス・シアターを通して~。お茶の水女子大学卒業論文
- 5) 木下康仁(2007)ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて。弘文堂、東京
- 6) 西條剛央(2007)ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編。新曜社、東京
- 7) 桜井厚・小林多寿子(2005)ライフストーリー・インタビュー質的研究入門。せりか書房、東京
- 8) 佐藤郁哉(2008)質的データ分析入門。新曜社、東京
- 9) 無藤隆 他(2004)質的心理学 創造的に活用するコツ。新曜社、東京
- 10) 佐藤まいみ(2002)日本の現代ダンスのアーティストが海外へ出る背景。View point セゾン文化財団ニュースレター No.22。財団法人セゾン文化財団、東京：B
- 11) 仙道弘生(2007)パフォーミングアーツにみる日本人の文化力。水曜社、東京
- 12) 平山素子(2004)ダンサーの視点からコンテンポラリーダンスを語る。上演舞踊研究、vol.5、お茶の水女子大学上演舞踊研究室、東京：11-15
- 13) 前田曜子(1999)ピナ・バウシュ研究~批評にみる作品の特徴を中心に~。お茶の水女子大学卒業論文